

- 信州大学の学生について(2)
- 平成26年度学内版GPIについて
- FD活動について
- スタッフから一言



信州大学の学生について(2)

本センターのNewsletter No.20においては、新入生調査(全学部1年生対象・2011年7月)、学習時間調査(全学部1年生対象・2012年7月)の結果に基づき、学生の授業外学習を促すために、課題を出すことの効果と方法について紹介しました。今回は、全学部4年生を対象とする大学生調査(2012年11月・有効回答数 1,344)の分析結果を紹介し、信州大学の学生の特徴について、考えてみたいと思います。

なお、全学及び各学部の詳しい調査の結果については、近日中にお知らせする予定です。調査の実施においては、各学部の先生方、職員の皆さまから多大なご理解とご協力をいただいたことに、センター員一同、深く御礼を申し上げます。

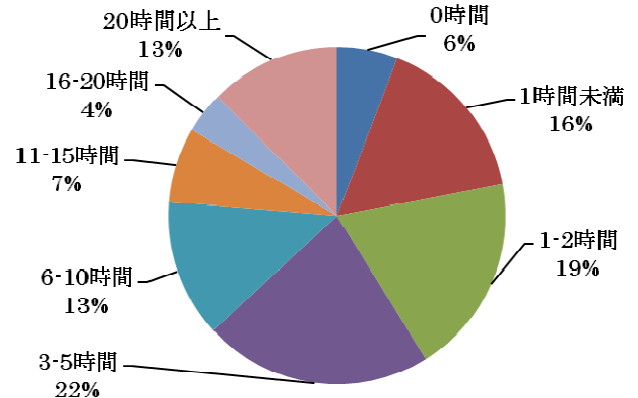


図1 授業外学習時間

信州大学に進学したのはどんな人なのか

2012年度の4年生の多くは、公立高校から進学しており(79%)、比較的学力が高い学生であると考えられます。保護者の学歴を見ると、父親の57%、母親の48%が大学や短大を卒業しています。88%の学生は自宅外通学者で、91%の学生は片道通学30分未満で大学の近辺に住んでいます。この調査に参加した他大学と比べて特徴的なのは、大学の近辺に下宿するケースが多いことです。

なぜ信州大学に進学したか

信州大学の学生は、その88%が「大学生活が充実している」と答えています。しかし、信州大学に第1志望で入学した学生は、56%に留まっており、「大学を選び直せたら、もう一度本学に進学する」と回答した学生も45%にすぎません。

信州大学に進学した理由は、「合格可能性が高かった」(79%)と「学費が適当であった」(61%)の2つで、自分の学力と親の経済状況が判断材料になっています。「一人暮らしができる」という理由も57%にのぼり、他大学を引き離しています。「本学で学ぶ内容に興味があった」学生は、59%存在するので、学生の5人に3人は、勉学に動機づけられていると言えるでしょう。

どれくらい勉強しているか

授業以外で一週間当たり6時間以上勉強する学生が37%いる一方で、1時間未満の学生も22%います。つまり勉強している学生と、それほど勉強していない学生との二極分化が進んでいます。ただし、一週間あたり20時間以上勉強する学生が13%程度いることは極めて頼もしい結果と言えます(図1)。

授業外の学習時間を分析すると、①読書時間の長い学生は授業外学習時間が長い、②大学で授業外学習時間の長い学生は、大学での成績が良い、という2つの相関がみられまし

た。高校での成績と大学での授業外学習時間には直接の相関はみられないのですが、高校での学習習慣が大学での学習態度に影響し、それが成績に反映されると考えるのが適切でしょう。

また、部活動やアルバイトなどの課外活動は、学生の授業外の学習時間を圧迫しないことが分析から明らかになりました。「部活動や同好会」の1週間当たりの参加時間が20時間を越える者の中に、授業外学習時間が20時間の学生が16%存在し、1時間未満の学生の25%は授業外学習時間が1時間にも達しません。アルバイトにも同様の傾向がみられます。適切な課外活動は、視野の拡大ややる気の向上などに積極的な効果を持っていると考えられます。

どのように勉強しているか

信州大学生の学習方式をまとめてみると、①自主的学習を友人とともにやること、②インターネットやLMSを利用して勉強すること、③教員が学生の学習に多く関わるということの3つの特徴がみられます。

84%の学生が「他の学生と一緒に勉強した」と回答しています。また、65%の学生が「授業内容について他の学生と議論した」と回答しています。つまり、自主的学習を友人とともにやっている学生がかなりの割合に達しています。

「研究、宿題のためにWeb上の情報の利用」、「インターネットを使って授業課題を受ける」と「提出」の経験を持っている学生は8割を超えています。インターネットが学習方式を大きく変えたことを如実に物語っています。

大学における授業で、「小テストやレポートが課される」と「学生自身が文献や資料を調べる」という内容の割合がそれぞれ93%と81%に達しています。学生の学習時間の確保のために、教員の努力がうかがえます。「出席することが重視される」との回答も87%あります。この特徴は全国平均と大差はありません。一方、教員が学生の学習に対して、もっ

とも多く行っているのは、「教育課程や授業に対する助言や指導」(60%)、「専門的な目標の達成の手助け」(59%)、「学習能力を向上するための手助け」(55%)です。

成績不振の学生の特徴は何か



成績が「中の下または下」の学生については、高校成績も下位である場合が多いです。また、不本意で進学した特徴がみられます。そして、授業の欠席が多く、他の学生との交流、共同学習経験も少ない特徴があります。さらに、授業外でも勉強しない傾向があります。奨学金の受給は成績不振と負の有意な関係があり、奨学金をもらった学生は学習に励む傾向があります。

学習時間と同様に、部活動、同好会の参加とアルバイト活動は学習成績にマイナス影響を与えることは確認されていません。

どのように大学生活を送っているか

生活の中で最も多く経験したのは、「ビールやワインなどアルコール飲料を飲んだ」ことです(86%)。「留学生と交流した」経験を持っている学生は31%います。注目すべきは、「ゆううつで、落ち込んだ」学生が44%いることです。その中で、13%の学生が常にゆううつを感じていると答えています。「やるべきことの多さに圧倒された」経験を持っている学生が61%います。一方、「個人的にカウンセリングを求めた」ことのある学生はわずか8%しかいません。

入学してからは、84%の学生が「他の学生との友情を深めた」、61%の学生が「大学教員と顔見知りになった」と回答しました。つまり、4年間の大学生活を通して、人的ネットワークの拡大が認識されています。ただ、4年間信州大学にいるにもかかわらず、16%の「他の学生と友情を深める」ことのできない学生と、39%の「大学教員と顔見知りになっていない」学生により注目する必要があります。



お知らせ

平成26年度学内版GPを公募します

本センターでは、学内の教育の質の向上につながる教育取組の中から、第2期中期目標・計画の遂行という観点において特に優れた取組を支援することを目的として、学内版GPの公募を行います。特に今回は、アクティブ・ラーニング(能動的学修)を促す授業方法や教育方法の取組を特別枠として採択いたします。公募要領等の書類は、本センターのウェブサイト(<http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/approach/campus-gp/2013/12/14751.php>)に掲載していますのでご覧ください。

※平成26年度学内版GP選考スケジュール 申請書の提出期限:平成26年1月31日(金)→書類選考→ヒアリング審査:平成26年3月17日(月)

活動報告

青年期の心理と認知の仕組みに関するFDシリーズ 第2回、3回、4回を開催しました

「青年期の心理と認知の仕組みに関するFDシリーズ」の第2回(10月30日(水))、第3回(11月12日(火))、第4回(11月29日(金))をそれぞれ開催しました。

第2回では、経済学部金早雪教授と高等教育研究センターの加藤善子准教授が講師を務め、「学生がより学ぶために、私たちができること」というテーマで、学生のやる気を高める「7つの実践(good practices)」に基づき、経済学部の新入生ゼミナールが事例として紹介されました。

第3回、4回は教育学部の島田英昭准教授が講師を務め、第3回は、「大学生の動機づけを考える—教育心理学の観点から—」というテーマで、内発的・外発的動機づけの説明、両者の間に位置する考え方やケース、また、動機づけと目標設定との関係についても紹介されました。第4回では、「大学生の理解を考える—教育心理学の観点から—」というテーマで、理解がどのように起こるのかが、認知心理学の知見から紹介されました。

青年期の心理と認知の仕組みに関するFDシリーズは第4回で終了となりましたが、4回を通して計146名の教職員の参加がありました。ご参加ありがとうございました。

★講演会、FDワークショップの詳細は高等教育研究センターのウェブサイトをご覧ください⇒<http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/>

スタッフからひとこと

アクティブ・ラーニング(能動的学修)は大学の教育現場で学生にとってきわめて重要であることは衆目の一致するところですが、今年度の学内版GPでは、学生の主体的な学修を促す質の高い教育を目指す取組や、授業時間外学習の確保を目指す取組をご提案いただきたいと思います。(センター長 小池 健一)

